
友達

いき♂

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達

【Nコード】

N2952R

【作者名】

いき
み

【あらすじ】

ありふれた三角関係の終焉、ひとつの別れ。
青春のページ。

（前書き）

2007年11月に書いたものです。

「あのバカが。見送りに来ねえで……」

小さくなっていく飛行機を見送りながら、俺はひとりごちた。今にも雪が降り出しそうな鈍色の空の下、雲に吸い込まれるようにして飛行機が見えなくなった。

見送りが済んだら手持ち無沙汰になった。用が済んだのだからこれ以上空港にいる意味はない。

だが、今日の俺はなんとなく別れの余韻に浸っていた。
唐突に。

「――！」

俺は声にならない叫びと共に、首を縮こまらせて背後を振り向いた。

首筋に冷たいものが押し当てられたのだ。

驚いて振り向いた俺の目の前に缶ビールを差し出し、そいつは話しかけてきた。

「らしくねえな」

奴だ。来てたのか。

缶ビールをひったくるようにして受け取りながら、俺は言っていた。

「何やってんだ。遅刻かよ。もう飛行機は行っちゃったぞ」

「悪い。……見送るのは苦手なんだ」

――はあ？

「わけわかんねえ。なんだその言い訳は……」
「……ってか、なんでこの寒いのに缶ビールなんだよ！ お前バカだろ」

「二度もバカって言いやがって……、まあいいや。どっかで呑みなおそうぜ」

こいつ、ずつといやがったのか。こそこそ隠れていやがって。まあいいや――

「——まあいいや。缶ビールありがとな」

奴は大げさに驚いた顔を向けてきた。

「熱でもあんのか？」

「うるせ。俺だって今日は呑みたかったんだよ」

まだ、飲み屋が開くには早い時間帯だ。俺たちはぶらぶらと郊外へ向かった。

奴は言った。

「なあ、せっかく俺が身を引いたってのに、なんで彼女を行かせちまっただんだ？」

「ホントにバカだなお前は。彼女はお前に惚れてたんだよ」

「……三度目。俺にはお前のほうがバカだと思えるんだけどなあ」
目的地に着いた。

ここに来る道すら購入した日本酒を惜しげもなくかけてやると、
奴が言った。

「もうそのくらいでいいよ。お前が呑む分がなくなっちまう」

「俺たちの友情に乾杯！」

そう言っただけで俺は、奴が眠る墓石を見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2952r/>

友達

2011年10月6日03時00分発行